

ミレーの

「種をまく世界がひらく」山梨県立美術館

美術館を楽しむ

1978(昭和53)年の開館から40年。

山梨に芸術の種をまき、

新しい文化の扉を開けた山梨県立美術館は、

今や70点ものミレー作品を所蔵する

世界に誇る美術館となった。

芸術の森公園の中、

四季折々の美しい自然に彩られた品格ある佇まい。たまたま

ようこそ、ミレーと出会える美術館へ。



ジャン＝フランソワ・ミレーの生涯。

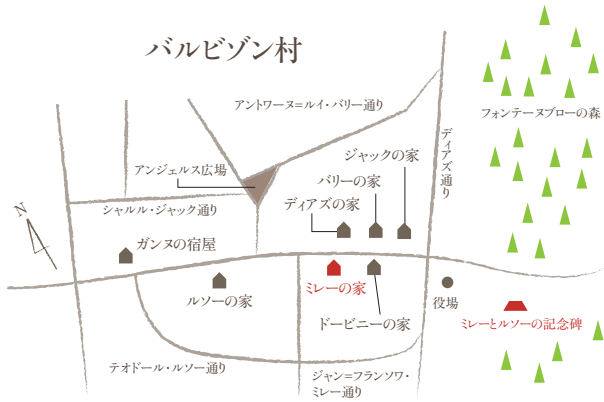
みずみずしい感性と温かいまなざしで、人間を、そして自然を描いた画家ジャン＝フランソワ・ミレー。絵の前に佇むと、静かな気持ちで自分の内面と向き合えます。ミレーの生涯、そしてミレーの作品の魅力を、山梨県立美術館の小坂井玲学芸員が語ります。

フランス・ノルマンディーより始まるミレーの原点。

ジャン＝フランソワ・ミレーは、1814年にフランス北西部ノルマンディー地方の村・グリュシーで農家の長男として生まれました。土地を持ち、古くから続く農家で、親戚には聖職者もいたことなどから、幼少期には古典的な物語や宗教に関する知識を身に付けていったようです。

小さい頃から絵を描くのが得意だったミレーは、18歳になるとグリュシーの近くにあるシエルブルルに出て絵画を学び、1837年にはパリに出て国立の美術学校で指導を受けることになりました。当時の美術教育では、神話や宗教を主題とした歴史画が高貴なものとされ、これらを描くことが基本であったため、ミレーもそれにならって学び始めました。

当時、画家の登竜門であったローマ賞の獲得も一つの目標でした。受賞者は国費で絵画の本場・ローマに留学することができたため、賞を獲得することは画家としての成功への近道でした。



バルビゾン村で制作していた代表的な画家たちを「バルビゾン派」と呼んでいた。彼らはフォンテーヌブローの森を愛し、森の豊かな自然を画題としていた。



1845

「ダフニスとクロエ」 油彩・麻布 / 82・5 × 65・0 cm
ミレーが物語を主題にして制作した作品。古代ギリシアの詩人ロンゴスの牧歌的な恋愛小説「ダフニスとクロエ」の一場面が描かれている。



1841-42

「ポーリーヌ・V・オノの肖像」 油彩・麻布 / 73・0 × 63・0 cm
ミレー初期の肖像画。描かれているのはシェルブールの仕立屋の娘、ポーリーヌ・ヴァルジニオス。ミレーの最初の妻となった女性だが結婚3年後に他界。



ミレーもこのコンクールに挑みますが落選。しかし1840年に、官展であるパリのサロンで肖像画が初入選を果たします。

サロンで入選という成功を手にしたミレーはシェルブールに戻り、依頼を受けて肖像画を制作したり、親しみやすい風俗画などを描いたりして生計を立てるようになります。1841年、ポーリーヌと結婚し、妻ポーリーヌを親密な視点で捉えた、魅力的な肖像画《ポーリーヌ・V・オノの肖像》を描き上げました。ポーリーヌと二人でパリに戻ったミレーの生活は、収入が少なく苦しかったのですが、過去の巨匠の作品を見てまわり、学ぶことができました。そのような暮らしの中、体が弱かったポーリーヌが1844年に亡くなり、ミレーは再びシェルブールに戻ったのです。

バルビゾンへ、そして農民を描く。

ポーリーヌを亡くしたミレーは生涯の伴侶となるカトリーヌ・ルメールと出会い、1845年にパリに戻ります。以降、神話画や宗教画をサロンに出品し入選を果たします。しかしながら、批評家たちの注目を大きく集めるには至りませんでした。

1848年、フランスは3度目の大きな革命期を迎えます。世情と文化が複雑に絡み合っているフランスでは、美術の世界も変わり、作品も一般大衆や農民を描いたものが目立つてきました。そしてミレー自身も自分が親しんできた文化圏の農民の生活や労働をレパートリーとして表現する

1853



「落ち穂拾い、夏」油彩・麻布／38.3×29.3cm

ミレーは生涯に3度、四季連作を制作しており、本作は最初の連作の「夏」にあたる。落ち穂を拾う貧しい農民の姿を主題としている。豊かな収穫の季節を表した作品。

1853-56



「鶏に餌をやる女」油彩・板／73.0×53.5cm

戸口で鶏に餌をやる女性とそこに集まる鶏。鶏もそれぞれの個性が描かれている。欄の向こうでは男性が働く姿もあり、農家の夫婦の日常生活が描かれた作品。

1850

Teku-Teku
FEATURE

「種をまく人」油彩・麻布／99.7×80.0cm

威厳に満ちた農民の姿を描いた本作はサロン出品の際にも賛否を巻き起こした。ほぼ同じ構図の作品がボストン美術館に所蔵されているが、同じ主題を繰り返し描くというのも、ミレーという画家を考える時に重要な要素である。

ようになり、サロンで入選を果たすのです。ミレーが農民画を描くようになったのは、社会にとって必要な表現であると感じたからだと思われまます。

1849年パリでコレラが流行し始めたため、ミレーは家族と共にバルビゾン村に移住しました。バルビゾン村は、パリ近郊にあるフォンテーヌブローの森の外れにあり、風景画家ルソーらの制作の拠点でした。ミレーは、ここで山梨県立美術館で所蔵する《種をまく人》を描きました。この作品は、移住後初のサロン出品作であること、また、農民画に専念していくミレーの初期の作品であり、ミレーの代表作といえるものです。一農民がこのような威厳にあふれた姿で描かれたことは、当時の慣習から逸脱する表現として非難されることもありましたが、新しい社会の主役である民衆を象徴する作品として、高く評価する文筆家や批評家もいました。

また、当館には1853年に制作された《落ち穂拾い、夏》も収蔵されています。「落ち穂拾い」は、収穫を終えた大地に穂を残し、貧しい人々に施して与える風習で、聖書にも記述されています。この光景をバルビゾン村で初めて目にしたミレーは、感銘を受けてこの主題に取り組みました。本作品は、春夏秋冬の移り変わりを四つの農事として描いた連作の一つでもあります。

1857-60



「夕暮れに羊を連れ帰る羊飼」油彩・板/53・5×71・0cm
群れを導く羊飼いの姿には、宗教的な象徴性も感じられる。家畜を農民から預かり、村を離れて過ごす牧人は、自然に精通する神秘的な存在としても見られた。

図版はすべて
山梨県立美術館蔵

1870



「グレヴィルの断崖」油彩・麻布/24.0×33.0cm

普仏戦争の戦火を避けて、港町シェルブールに滞在した際に描いた作品。静かにそこにある海のあるがままの表情が描かれている。

1865



「雁を見上げる羊飼いの少女」パステル紙/58・0×41・6cm(寄託作品)
ミレーは優れたパステル画の作品も制作している。編み物をする羊飼いの少女たちが冬の訪れを告げる雁の群れを見上げる姿が細やかな表現で描かれている。

美しい色彩と光で描く
人間の原風景。

四季連作への取り組みにもみられるように、ミレーは労働する人間をテーマにしたというよりは、自然と共にある人々の生活をテーマとした画家といえます。画業後半には風景画も多く制作していて、明るく、鮮やかな色彩を用いた繊細な表現が魅力的です。また、風景の中に小さく人々の姿が描かれていて、農民の姿を主役として展開した作品とのつながりも感じられます。ただ美しい景色としてではなく、人が生活をする環境として描かれているように感じられます。

ミレーは1875年にバルビゾン村でその生涯を閉じるまで描き続けました。ミレーが描く風景は人間の原風景ではないでしょうか。ふとした日常の気付きを積み重ねていくことで、一層ミレー作品の持つ深い魅力が心に染みてくるようになります。そして見たことがあるものに対して感じたり、考えたり、見ているものが何なのか考えるきっかけにもなる、ミレーの絵画とは、そういうものだと思います。



山梨県立美術館

小坂井 玲 学芸員